第１３８号

# 芥川だより

発行日＊＊＊２０１８年７月１日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集・発行人
下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部１００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

## 六甲山チャレンジ１０００回

定年を迎えた友人らを幾人も身近に見てきたが、いよいよ自分の番になった。友人らはそれなりの退職金を得て皆優雅に見えたが、私はそうはいかない。退職金もなければ年金もない、わずかばかりの保険金があるだけである。とても老後の資金としては足りない。これまで好き勝手に生きてきた代償だから、仕方がない。

しかし、捨てる神あれば拾う神ありで、家内が何とかしてくれるだろうという甘い考えがある。そうなれば、私は極めて苦渋の日々を過ごさねばならない。カミさんの尻に敷かれ下男のように細々とした用を言いつけられることに耐えねばならない。これまで多くの客から主人の小言を聞いてきたから、およそのことは想像できる。まず、一緒にいる時間を少なくし、自分の事はすべて自分でする。山で先輩にしごかれたおかげで、やろうと思えば料理でも何でも出来ると安易に考えている。

介護問題に立ち向かうという大義を自分に言い聞かせて、義母の介護を率先してやり、出来れば週に 2 日ほど老人施設でアルバイトをさせてもらい飲み代を稼ぎながら義母の介護に役立てたいという魂胆もある。次は、この芥川だよりを 200 号まで発行する。これもひとえに自分の為である、自分の想いを表現するというのは精神衛生上極めてよい。最後は、これまで通り六甲山通いを続ける。タイトルは「六甲山チャレンジ１０００回」である。自宅から近いこともあり、宝塚から六甲最高峰までの往復は人も少なく気持ちのよい樹林の道が続く私のお気に入りのコースで、片道 12 キロ往復 28 キロは比叡山の千日回峰行のコースにも匹敵するロング・コースであります。

私には、おかしな妄想があって、雪が降る寒い山道を歩きながら疲れ果てて凍死する野垂れ死が最高の死にざまだと思っているのですが、これが非常に難しいことだと最近分かってきました。健康管理と精神力を鍛え続けなければ出来ない大きなロマンだと気づきました。少々のことではへこたれない強い根性が要ります。尊敬する戸田巽さんに少しでも近づけるように日々己に喝を入れて生きてゆきたい、等と考えていますが、どうなることやら？

## 死をめぐるあれやこれ（46）

石川　吾郎

パンとサーカス

サッカー大会の狂乱のどさくさに、安倍政権は国会を延期して高プロを含む「働き方改革法案」を成立させた。この法案には、さまざまな問題点が指摘されている。最たるものが高度プロフェッショナル制度（高プロ）。政府は「労働者が柔軟な働き方が可能になる」と説明しているが、現実には経営者が、戦後労働者を保護してきた「労働基準法」という法規制から解放されることになる内容なのだ。

◆残業代をゼロにして残業時間の規制もはずして、過労死の増加が心配される高プロは、年収が一千万超の人から適用されるとされるが、これは法律成立後に拡大されることは目に見えている。実際に経団連はすでに年収四百万程度の労働者まで拡大を要求している。この範囲拡大は国会を通さず省令だけで簡単にできてしまう仕組みになっている。最初は制限をかけて国民を油断させて、後で適用範囲を拡大させるのは労働者派遣法の例がある。現在では派遣労働は一般的になってしまって、これによって正社員への道が閉ざされ不安定労働を強いられる例は今の日本に蔓延している。

◆また残業に初の罰則付き上限規制を設けたが、これは「過労死」レベルの上限に過ぎず、非正規労働者の待遇改善とする「同一労働同一賃金」も、実は正規労働者の給与を非正規の賃金に引き下げることを可能にすると言われている。またこの法案のニード調査は、たった十二例で行われただけ。提出された実態調査の内容はデタラメであったことが明らかになっている。（裏に続く）

◆さらに政府は、通常国会を七月末まで延期をしたが、これは明らかにこの法案を通すためのもの。この期間にはサッカーワールドカップがあり、国民がそれに熱狂しているうちに、成立させてしまおうという魂胆が見え透いている。実際に六月末からテレビ報道はサッカーの話題一色になり、国民の関心をサッカーに向けさせ、国民に深刻な影響を与えることになるこの法案の国会通過を難なく許してしまった。安倍政権はさらにカジノ法案の成立を狙ってくるだろう。

◆国民の関心が、スポーツやスキャンダルや災害などに向いている間に、国民に重大な影響を与える法律を通していくというのは、典型的な ナチスの手口(麻生太郎はかつて ナチスの手口に学んだらどうかね」と発言した)と言える。しかも安倍政権は明らかに、この ナチスの手口」に手慣れてきている。この手口にマスコミが加担して、普段なら批判的なコメントを報道するまだ ましな」報道番組まで、サッカー一色になってしまって、こういった動きを伝えなくなっている。

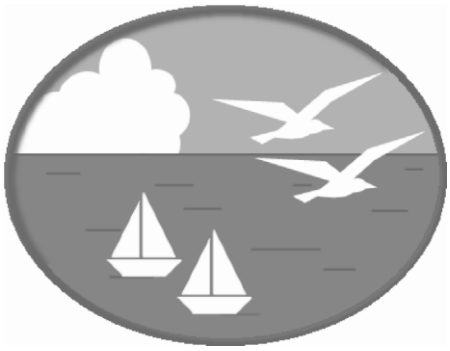
今の日本社会は、ほんとうに危機的な状態にある。

さて、東京オリンピックでは、政権は何を企んでいるのだろうか?

(補足)この解説は、ネットYOUTUBEのページから 森永卓郎:ゴールデンラジオ 大竹紳士交遊録 2018.07.02」で検索して、ラジオの森永氏の解説を聴いていただくことをお勧めします。

## 芥川だより一三八号　目次


| | | ページ |
|---|---|---|
| 巻頭エッセイ | 下村嘉明 | 1 |
| 巻頭コラム | 石川吾郎 | 1 |
| 素老人☆よもだ帳 52 | 坂本一光 | 2 |
| 哲学爺いの時事放談 2 | 祖蔵哲 | 4 |
| 大峰奥駆道 17 | 梵店主 | 6 |
| 我がおくのほそ道の旅 18 | 成瀬和之 | 7 |
| B級サラリーマン渡世譚 60 | 明石幸次郎 | 8 |
| オクラの山たより 22 | 困了生 | 9 |
| 邪馬台国と火の国 補足1 | 満田正賢 | 13 |
| アウトソーシングとディシプリン | 大江雉兎 | 16 |
| 編集後記 | 嘉 | 17 |
| ふみの道草 1 | 山椒魚 | 18 |
| 俳句 | 土田裕 | 18 |
| | 影山武司 | 18 |

## 素老人☆よもだ帳（52）

坂本　一光

◆「風の人、火の人、山の人」になりたい

―八月には八月の意味があること

なぜか夏が来れば思い出す。『風の人、火の人、山の人』という詩があります。河島英五作詞、南こうせつ作曲の歌です。

風の人、火の人、山の人

小さな事にこだわらず
さわやかに人を受け入れる
風の人になりたい
ひとつの事に打ち込める
激しさで君に求めよう
火の人になりたい
やさしさだけでは
生きてゆけないから
傷付け合いもするだろう
黙って人を信じよう
山の人になりたい

心にしみる微笑みと
真直ぐな気持ちなくさない
風の人になりたい
命の重さ尊さを
抱きしめて胸に守り抜く
火の人になりたい
幸せだけでは
生きてゆけないから
かなわぬ今日を嘆くより
黙って明日見つめよう
山の人になりたい

先頃、沖縄県と県議会が主催する「沖縄全戦没者追悼式」がありました。テレビニュースを観ながら、「六・二三、また夏が来るなあ」と思ったものです。　先の大戦末期、鉄の雨が降ったという沖縄地上戦では二十数万人の命が失われました。六月二十三日は沖縄戦終結の日です。それから七十三年目の「慰霊の日」に翁長雄志知事は「平和宣言」の中でこう言いました。

私たちは、この悲惨な体験から戦争の愚かさ、命の尊さという教訓を学び、平和を希求する「沖縄のこころ」を大事に今日に生きています。戦後焼け野が原となった沖縄で、私たちはこの「沖縄のこころ」をよりどころとして、復興と発展の道を力強く歩んできました。…　昨今、東アジアをめぐる安全保障環境は、大きく変化しており、先日の、米朝首脳会談においても、朝鮮半島の非核化への取り組みや平和体制の構築について共同声明が発表されるなど緊張緩和に向けた動きがはじまっています。平和を求める大きな流れの中にあっても、二十年以上も前に合意した辺野古への移設が普天間飛行場問題の唯一の解決策と言えるのでしょうか。日米両政府は現行計画を見直すべきではないでしょうか。…

追悼式に参列の為政者たちに「沖縄のこころ」はどう聞こえるのでしょうか。先の米軍戦闘機墜落事故を受けて安倍晋

三首相は、「世界一危険な普天間基地の一日も早い返還が必要です」、と木で鼻をくくったコメントを繰り返すだけでした。

素老人は思います。「辺野古に新基地を造らせない」という「沖縄のこころ」は、やがて「日本のこころ」になる日が来るであろう、と。それはなぜか。

一強は一票で変わる一晩で

と思うからです。そのためには、国民に主権がある限り（あるのだから）あきらめないことです。

人間も、命も、自然も尊いと
思う心が辺野古に寄せる

人間を、命を、自然を尊いと
思う心が世界を変える

さて、半世紀前に大学生の時代を過ごした素老人には、六月二十三日とともに四月二十八日も今日につながる、つまり安倍晋三首相の言葉を借りれば戦後日本を呪縛する戦後レジームに関わる忘れ難い日です。どういうことか。

敗戦後占領下にあった日本がいわゆる単独講和によって主権を回復したとされるのが、サンフランシスコ条約が発効した一九五二年四月二十八日です。この日は政府にとってめでたい「主権回復の日」ですが、同時に沖縄などが国連統治という米軍占領下に引き続き置かれることが確定した日であり、特に沖縄では「屈辱の日」と呼ばれています。またこの日は、単独講和と同時に米国との間に締結された（旧）安保条約が発効した日です（講和条約は公開の場で署名されましたが、安保条約は吉田茂首相が連れて行かれた米軍基地の中で署名されました）。それは、幕末から明治に向かうとき尊王攘夷論が尊王開国論に突如すり替わったように、戦前の鬼畜米英から百八十度転換して、今では首相が「わが国は完全に、百パーセント米国とともにある」とまで言うようになった、政治も、したがって軍事も経済も文化も米国に依存（従属）することが日本の国のかたちになった日でもあります（この日本の国のかたちを戦後日本の新しい「国体」と称する論があります。国体を象徴するものが菊から星条旗に変わったのだ、と。まさしくその通りだと素老人も思います）。四月二十八日は沖縄にとってだけでなく、国の基本路線として、言ってしまえば対米従属の道を受け入れた、日本の「屈辱の日」でもあるでしょう。興味深いのは、乱暴な言い方をすれば、尊王攘夷も尊王開国も、新しい権力中枢を志向しそれを担った勢力は変わらず、同じであったことです。それは、戦前の国体を担った者たちと戦後の新しい国体を担った者たちに断絶はなく、同じであったこととみごとに符合しています。

一方、六月二十三日は沖縄戦終結の日であると同時に、一九六〇年の安保闘争に示された民意を無視して岸内閣が改定した（新）安保条約が発効した日でもあります。この日付の一致には条約改定上の必然性があるのか、それとも同盟の「主人」としての米国の意志があるのか、ちょっと気になっています。

◇八月には八月の意味があること

二〇〇二年八月三日に、伊藤信吉という九十五歳の詩人が亡くなりました。同郷・群馬県の詩人のことを書いた『萩原朔太郎研究』などで知られた人です。七十歳のとき、およそ四十年ぶりに『天下末年』という詩集を出しています。そのなかに、「八月は　魔の月」とうたった詩があります。

どうして、八月は魔の月なのか。この百年の歴史を紐解いてみると、一九一〇年（明治四十三年）には、韓国併合に関する日韓条約調印がありました。一九一四年（大正三年）、日本はドイツに宣戦布告し、第一次世界大戦に参戦します。一九一八年（大正七年）、政府は、ロシア革命に干渉するシベリア出兵を宣言。一九四五年（昭和二十年）には、広島と長崎への米国による原子爆弾投下があり、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏しました。これらはすべて、八月の出来事でした。そして、こう詠っています。

今年めぐってきた八月。
来年めぐって来る八月。
それは魔の日が二度とあってはならぬと
八月を語り継ぐ
そのための
八月である。

さて、詩人が亡くなったのと同じ年の八月に、今振り返ってみればはっとするニュースがありました。今降り返ってみる今とは、二〇一七年七月、国連が核兵器禁止条約を議決した今であり、また本年六月、米朝首脳会談によって朝鮮半島の非核化及び平和体制の構築などが合意された今です。二〇〇二年は被爆五十七周年の年ですが、例年のように平和を祈る式典が広島・長崎で行われました。その平和宣言の中で、二人の市長がともに、はじめて、米国を名指しして批判したのです。こんなことはかつてあり得ませんでした。そして核兵器の使用される可能性、核戦争の危険性に対する強い危機感を表明しました。

例えば、広島市長は、こう言っています。

その傾向は、昨年（注：二〇〇一年）九月十一日のアメリカ市民に対するテロ攻撃以後、特に顕著になりました。被爆者が訴えてきた「憎しみと暴力、報復の連鎖」を断ち切る和解の道は忘れ去られ、「今に見ていろ」そして「俺の方が強いんだぞ」が世界の哲学になりつつあります。…

ケネディ大統領は、地球の未来のために

は、全ての人がお互いを愛する必要はない、必要なのはお互いの違いに寛容であることだと述べました。…

どんなに小さくても良いから協力を始めることが「和解」の意味なのです。また「和解」の心は過去を「裁く」ことにはありません。人類の過ちを素直に受け止め、その過ちを繰り返さずに、未来を創ることにあります。…

アメリカ政府は、「パックス・アメリカーナ」(注：超大国である米国によって世界の平和が維持されているとの意）を押し付けたり世界の運命を決定する権利を与えられている訳ではありません。「人類を絶滅させる権限をあなたに与えてはいない」と主張する権利を私たち世界の市民が持っているからです。

日本国憲法第九十九条は、「天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負う」と規定しています。この規定に従うべき日本国政府の役割は、まず我が国を「他の全ての国と同じように」戦争のできる「普通の国」にしないことです。すなわち、核兵器の絶対否定と戦争の放棄です。その上で、政府は広島・長崎の記憶と声そして祈りを世界、特にアメリカ合衆国に伝え、明日の子どもたちのために戦争を未然に防ぐ責任を有します。…

ここに述べられていることは、私たち自身の未来に関わる重大な問題です。二つの被爆都市の平和宣言が、期せずして一致して、こういうことを述べていました。十六年前のことですが、そのとき世界はここまで来たか、と思ったものです。その世界に今、先に述べたように変化の兆しが見え始めています。こんな時代に人間精神のありかをどこに求めるか、目を遠く過去に未来に、そして広く世界に向けていなければならないと思います。

誰であれ皆、自分自身の生きる夢や希望を探し求め、それを実現するための課題を見つけようとしています。そのとき、自分の生きる世界が、どんな問題に直面しているか。例えば、戦争と平和、世界の繁栄と貧困、地球の自然環境の豊かさと破壊の深刻さの問題などは、いずれも簡単に個人の手に負えない大きな問題ですが、それは一人の人間が自分自身の夢や希望を実現するために抱えている個人的な諸課題と決して無縁な問題ではありません。無縁でないことはジョン・レノンがイマジンで、世界はお前の両肩にかかっているわけじゃないと詠ったのと同じくらい確かなことです。目を開いて見よ、そうすれば世界の果てが見える—そんな時代が始まっています。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

哲学爺いの時事放談（2）

## 「地震と金正恩」～「美と崇高の哲学」

祖蔵　哲

哲学屋が時事ネタを扱うことになって第二号である。時事と哲学、相容れないジャンルでテーマに困るのではと心配していたがそれは杞憂であった。なぜなら、最近は事件が多い。しかし正確にはこれは間違いであろう。昔も同じくらい起こっていたのかもしれないがその時代は情報機関が発達しておらず我々が知ることができなかっただけである。

### 1. 自然災害と事件

さて、事件は「起こるもの」だが、自然災害は「起きるもの」である。事件は人為的なもの、つまり「人が原因」で起こる。これに反し「自然災害」は「自然が原因」で起きる。哲学的な違いは前者が「偶然的」、後者が「必然的」ということになる。「偶然と必然」は「様相」という哲学の重要なテーマであるが今回は詳しくは触れないでおこう。その後者の「地震」が最近大阪北部を襲った。爺は京都に住んでいるが、かなり揺れを感じた。その時は一瞬 かの、南海地震の発生を想像した。幸いその最悪の規模の地震ではなかったが、その地震発生の「必然性」は科学的に予知されているのは衆知の事実である。これからは「爺のボヤキ」になるが、今言ったように地震の到来は「確実」「必然」なのである。それに対して、国民の生命と財産を守るべき「国」は何をしているというのか。いくら人間の科学技術が発達した現代にあっても「自然の力」には勝てない。第一の策はその力から「逃げる」ことである。「都市機能の分散」これが最大の課題であると考えるのであるが、「国」は全く逆のことをしている。オリムピックを開催するために一時的にだけ使用する巨大な施設を首都「東京」に作ったり、カジノを推奨するために巨大娯楽施設を第二の都市「大阪」に建設したりしている。これらは「狂気の沙汰」としか言えない。「バベルの塔」と「ソドムの町」を思い起こすのは私一人だけであろうか。まあ、ボヤキはこれくらいにしておこう。あまり長くなるとまた新シリーズ「哲学爺のボヤキ放談」にタイトルが変わってしまう恐れがある。

### 2. 地震の恐ろしさと「無限」

その自然災害である地震は「恐ろしい」。なぜ恐ろしく感じるのかというと、それは自然の強大な「力」が私たちに平等に理由なく「暴力」をふるうからである。「自然の力」は優しい時は私たちに「恵み」をもたらす、否、私たちは自然の存在がなければ生きていけない。「食料」「エネルギー」「生産物原料」など当たり前であるがすべて「自然の力」でできたものである。そしてもっとも重要なことであるが、日常私たちが忘れていること、それは私たちも「自然の一部」であるということである。私たち人間

の力に比べれば自然の力は測り知れない。計測不可能なくらい「大きい」ものである。この「計り知れない」ということを概念的に表す言葉が「無限」である。つまり、私たちは想像を超える「大きなもの」「巨大なもの」の「力」を体験したときに「無限」の存在が意識されるのである。この体験、計測不可能な「大きさ」の時はその対象の存在を認識できなかったが、「無限」という概念を心が感じた瞬間、その対象「無限」が「存在」「存在者」となって現れるのである。実際、古代の神話は「自然災害は神の怒り」であると物語っている。自然災害が大きければ大きいほどこの意識、「存在者」の存在の意識も大きくなる。「外なる自然」が、「内なる自然」つまり私たちの「心」の自然を呼び起こしているのである。パスカルのパンセには有名な言葉がある。少し長いが引用しよう。『人間は、自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。これを押し潰すのに宇宙全体が武装する必要はない。一つの蒸気、一つの水滴もこれを殺すのに十分である。しかし宇宙がこれを押し潰すとしても、そのとき人間は、人間を殺すこのものよりも、「崇高」であろう。なぜなら人間は、自分の死ぬことを、それから宇宙が自分よりずっと勝っていることを知っているからである。宇宙は何も知らない』学校の教科書でも出ているので誰でも知っているので解説はいらないであろう。「無限の存在者」はパスカルでは「宇宙」となっている。しかし、この箇所だけ読むとパスカルの思想を全く反対に解する恐れがある。実際、学校でも私たちは「人間は自分が死ぬことと宇宙よりも劣るということを知っている、それ故に、それを知らない宇宙に優越している」という文字通り「弱い葦であるが考える葦である故に宇宙に勝る」と。これはデカルトの考えであり、宿敵のパスカルはその反対である。別の箇所では「動物は自分の死を知らない、人間はこれを知っているから悩む、人間は動物より憐れだ」と言っている。パスカルも語る、この自然の「大きさ」「偉大さ」は「哲学的崇高」と呼ばれる。国語辞典によると、崇高とは「気高く、貴いさま」とあるが、より一般的な情報源「ウイキペディア」によると『崇高とは美的範疇であり、巨大なもの、勇壮なものに対したとき対象に対して抱く感情また心的イメージをいう美学上の概念である。計算、測定、模倣の不可能な、何にも比較できない偉大さを指し、自然やその広大さについていわれることが多い。』とある。この「美的範疇」つまり「概念」が「美学」となり哲学になるのである。

## 3．哲学と個人的感情～「崇高」

哲学は一般に「感情」について語るのを不得意とする。なぜなら「感情」は「主観的なもの」であり「個人的」なのであるから「客観的」「一般的」概念を扱う哲学は苦手である。『僕、これは「嫌いだ」、これは「美味しい」』といった感情表現の命題はそれが「正しい」とかいう「真偽の問題」ではない。哲学は「命題」つまり「問い」の「真偽」を吟味しその根拠を説明するのが仕事であるからだ。Aさんが思う「このケーキは美味しい」は常に真である。それに反して「個人の判断」「主観的感情」が「他者」の客観的「賛同」「同意」を得ることができるものがある。それが「美」である。『この花は美しいね』これは『そうだね』との共感を呼び起こす。「美」は古来より共通して皆の「賛同」を得てきた。その「賛同」する原因をプラトンは「美のイデア」で説明している。すなわち人間は生まれる前に天上界で「美の原型」つまり「イデア」を見てきているので地上界にあってそれを思い出しているのだという「想起説」でもって語っている。このようにして「美」に関する「主観的感情」が哲学として可能になったのである。それでは「大きい」という「感情」はどのようにして哲学で語ることが可能になったのであろう。先ほどの事典の「崇高」の解説にもどろう。『スイス・アルプスの巨大な山塊。十七世紀・十八世紀には多くのイギリス人がグランド・ツアーでアルプスを越え、荒々しい風景を目の当たりにした。山塊は、当時の自然の美の観念からはかけ離れた存在であり、むしろ恐ろしいものであった。しかし安全な場所から見ている限り、巨大な山や雲から感じる恐怖は、むしろそれに対する抵抗心を起こしたり精神を高揚させたりするものだった。これにより感じる「崇高」は、当初は「美」とは異なる観念だった。』「崇高の画家」といえ十九世紀の風景画家ターナーを思い出す人が多いだろう。ターナーが活躍したのは、英国の産業革命期。国外ではフランス革命などが起き、世界中が新しい時代に向かってうねりをあげて進んでいる時期だった。新しい技術や科学が次々に生まれ、親の世代には分からない思想や価値観が広まっていく、そんな世紀末の状況であった。つまり人間の技術が発達することによってかえって「自然の偉大さ」が意識された時代でもあった。そして「美しい」という「美」の感情とはことなる「崇高」の感情が生まれるのである。それまでの西洋絵画での「美」は、神話、聖書のエピソード、歴史上の大事件や偉人などをテーマとした歴史画が上位におかれ、「風景」は歴史画などの背景としての意味しか持っていなかった。ところが十八世紀後半から十九世紀になると、ヨーロッパ大陸へのグランド・ツアー（長期旅行）が定着し、また変化の激しい世の中の移り変わりを描き留めたいという要求もあったのか、風景をメインに描く人々が現れる。風景画というジャンルが英国で市民権を得るのはこの時代で、ターナーはその初期の一人である。そしてそれ以前の一七五五年リスボン地震も、自然の恐ろしさをヨーロッパの精神に刻み、崇高の概念を発達させた。これ以後、美学や哲学においては「美と崇高」を対立的なものとみなしたり、一体としてみなすという語り口で現代に引き継がれている。

さて、「崇高」という『「理屈なしの」「個人的な」感情が「全体」ものとして承認される』というこの美学的範疇の概念は、政治体制としての「全体主義」に通ずるという議論がある。つまり、「全体主義」というものも一つの個人「感情」を「束ねる」ことによって「全体」を構成しようという「ファシズム」と親和性を持つからである。また、その意味からは「個人崇拝」を基盤とする「独裁政治」にも通じる。現代の独裁者と言うと、世界的知られる、その人「金正恩」である。ここで、またまた寄り道であるが、彼の名前は外国語表記でも「Kim Jong-un」である。しかし、同じアジアの日本人の名前の表記は「シンゾウ・アベ」である。中国人名表記も「シー・ジンピン」である。なぜ日本人名だけが氏名、姓名逆になるのか。ここに日本の西欧コンプレックスの名残があるとは爺の考え過ぎであろうか。余談はここで止めにして先に進もう。

4. 個人的主観「崇高」と「全体主義」
金正恩へ～激情的理性の暴走

個を優先するという「個人主義」に対するのが「全体主義」である。ここでの「主義」は「イズム」の日本語訳である。「イズム」とは「行為動詞」を「名詞」にする「接尾語」である。哲学での「行為」になるとこれが「イデオロギー」になり「イデア」(理念)の実現に関する行為の意味になる。「理念」とは「理性的概念」であるから、本来は「感性」つまり「感情」からは最も遠くならなければならない。しかし、現実には「理性」は「理念」に向かう時に感情とむすびつき暴走するのである。「イデオロギー」とは、特定の「理念」を前提とする「思想」のことである。よって、「全体主義」は個人より全体を優先する思想となる。近現代史における全体主義は歴史研究家によると、『イタリア、ドイツ、日本などのように後れて資本主義の成立した国々が、欧米の先進諸国に対抗して強力な権威国家の確立を目ざすために国民を指導した政治原理である。これらの国々は、ほとんど植民地をもたず、また経済的基盤が脆弱であったから、第一次大戦後から世界大恐慌の時期にかけて未曽有の経済的危機に陥った。そこで、伊・独・日3国においては、ファシズム、ナチズム、天皇制ファシズムなどの政治原理によって、独裁制に基づく政治支配を通じて国民的意志統一を図り、国内経済の発展と海外侵略による資源の獲得を追求する政策をとる必要があった。そのような政策を根拠づけた思想原理が全体主義である。』と分析されている。なお、ファシズムとはイタリアのムッソリーニの党、国家ファシスト党の名称からきているもので「結束主義」というような意味であるらしい。まあ、感覚通り熱狂的全体主義というイメージである。ファシズムを伴う全体主義は個人権威主義と結びつき「大いなる」「力」すなわち「崇高」の概念を呼び起こすことによって、「個の感情」を「全体」に統合する。その際、用いられるのが「大いなる力」「暴力」である。「粛清」や「テロ」は潜在的な力の現れである。

最初は突飛な発想と受け止めたかもしれない今月テーマ「地震から独裁制」へという思考の展開は哲学的「概念」を媒介として議論される。私たちが「大いなる」ものを感じて何故、単に屈服するのではなくて「自ら率先して従い、さらにそれを超えて暴走するのか」。それは自然の「暴力」としての災害がその無限の力をわたし達の心に感じ、想像させ、その「無限」の大きさを推し量るとき、自分自身で立てた「無限の理想」と「すり替え」を行うからである。ここに私たちの「理性」の危うさもある。「理性的」とは「感覚的」とは対称の思慮深く、考え抜いた、人間にとって良いものと考えられている。しかし、この「理性」は崇高の「大きさ」を感じた時、思わぬ行動をとるのである。本来「美的」「感覚的」中立的価値概念であった「崇高」が「理性」と結びつくことによって全体的価値をもつのである。地震の「怖さ」も金正恩の「怖さ」も案外「理性的」なのである。

## 大峯奥駆道(17)

梵店主

弥山(一八九五メートル)から急な木の階段を駆け下りるように歩きながら、私は皇太子殿下のことを考えていた。

皇太子就任後、初めて登られた山がこの大峰であると聞いたからだ。山上ヶ岳から弥山を登り天川村へ下りるルートである。どうしてこの山域・このコースを選ばれたのか、という疑問が浮かんできて消えないから、私は歩きながらあれこれと考えていた。

すると、昔読んだ、太平記を思い出した。南北朝時代を描いた軍記物なのだが、大変面白く読んだ記憶がある。後鳥羽上皇、その子護良親王や忠臣であった楠木正成、新田義貞などが面白く書かれている物語である。後鳥羽上皇親子が奥深い吉野の山中を逃げ惑う世界を想像した。

必死になって親子を追いかけてくる北朝の将兵に対して吉野の人たちは抵抗して、後鳥羽上皇親子を守ったのである。

紀伊半島の真ん中に位置する吉野は、山深くて容易に人を探し出せる所ではないが、地域の人たちの協力なしでは生きながらえることは出来ない。食べ物にしても、逃げる山道にしても村人の助けなしでは到底不可能なところである。

私は、南北朝の時代を空想する、逃げ惑う後鳥羽上皇親子を殺そうと攻めてく

る北朝の兵にたいして山の茂みに隠れながら後醍醐天皇を守る為に北朝の将兵に矢を射る南朝の兵に天川村の人達は自分たちが作った矢を提供し続けたのだ。そうして天川村の村人は後鳥羽上皇を守り続けたのではないのか。

今の皇室は北朝系らしいが、それでも皇太子は大昔に天川村の人々が後鳥羽上皇親子を助けてくれた村人の温情に対してせめてもの償いと思い天川村への下山を決意されたのだと勝手に推察した。

そのように思いを巡らすと、皇太子の熱い想いが伝わってきて、皇太子に対する親近感が強くなり、私が歩くこの道も昔と今が重なり合ったようで非常に感慨深く感じられた。

これから下る天川村は、大昔は矢の生産地であった。独占的な生産地であったらしい。それは、この一帯に生い茂る笹、スズ竹が矢の材料に適していたからである。戦国の時代においても、天川村は天領とされ年貢も矢で納めたとか。それほど昔はスズ竹で作った矢は重宝したのである。

竹は、すぐに生い茂り道を閉ざしてしまう。非常に生命力がある植物である。また、多くの種類があるが、この大峰のスズ竹が矢に適していたとは、思いもよらなかった。物は、使いようである。邪魔にもなるが、使い方次第では、宝ものになる

弥山から二時間ばかり歩いて狼平の避難小屋に着いた。やはり、この小屋も立派な丸太で造られていた。皇太子さんが通られるというので作り直したのだろうと思った。

私が歩きながら感じたのだが、皇太子は偉いなあと思った。私は、歳は取ってはいるがいちおう山岳部のＯＢである。私でさえ精魂尽きそうになった山を歩きたいと考えられる、その気概である。

普通なら、洞川から山上ヶ岳を往復するのが一般的である。山上ヶ岳から弥山までの急峻な稜線を歩くのは、かなりの勇気と体力が要る。もちろん多くの案内人や随行者がおられるだろうが、皇太子といえども、自分で歩かねばならない。

こんなことを考えながら、歩き続けること五時間半、やっと天川村に着いた。渓流が流れ、素朴な家々が一角に固まっていた。高ちゃんと早速近くの旅館でひと風呂浴びさせてもらい、町営の売店でビールとうどんを注文した。

ああ、これで今回の山登りは終わったという安堵感に心を満たしながらも、計画通りに本宮まで行けなかった悔しさと、高ちゃんに対する申し訳ない気持が段々と強くなってきた。もう一度、必ず近いうちに挑戦しようと覚悟に決めた。

今回の計画変更で私は、大峰奥駈道を歩く計画を考え直さなければならないと思った。大峰・奥駈道は簡単な山ではない。手ごわい山だと思いつつも、奥深い味わいがある山の魅力に一段とひかれる私であった。

## 我がおくのほそ道の旅（18）

成瀬　和之

出発の三月二十七日（陽暦五月十六日）、夜明けの空はぼんやりと霞み、折からの有明月の光は弱かったけれども、はるか西方に富士山を、かすかながら見ることができた。上野・谷中など、江戸の名所の桜を、ふたたび見るのはいつになるのだろうと思うと、さすがにしんみりした気分になる。

親しい連中はみな、前の晩から集まり、今朝は深川から一緒に船で送ってくれる。千住（東京都足立区）という宿場で船から下りると、これからのはるかな旅路を思って、胸にこみあげるものがあり、この世は夢・幻のようにはかなく、別れの涙など無用だと知りながらも、別れを惜しんで涙を流し合った。

行く春や鳥啼き魚の目は涙
過ぎゆく春を惜しんで、人間ならぬ鳥までも鳴き、魚の目は涙でうるむ。今、旅に出る私どもを囲み、みんなで別れを惜しんでくれた。
季語―行く春

これを旅の句の最初として出発したのだが、名残惜しさになかなか足が前に進まない。道の途中にみんな立ち並んで、私たちの後ろ姿が見えなくなるまでは、と見送っているようだった。

（現代語訳）

弥生も末の七日、あけぼのの空朦々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰幽かに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。むつまじき限りは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて船を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまではと、見送るなるべし。（原文）

「おくのほそ道(全)角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典

この「行く春や」の句の「行春」は春は行き、人は旅立つという現実をさしています。一方「鳥啼き魚の目は涙」はその現実に触れて芭蕉の心に湧きおこった鳥は鳴き魚は涙を流しているという芭蕉の想像、つまり心の世界です。

「草の戸も」の句も「行春や」の句も現実に触れて心の世界を開いた古池型の句ですが、どちらも現実、心の世界という順番で並んでいます。これは原因、結果の順にいう句です。

これに対して本家本元の古池の句は心の世界を先にいって、次にそれを呼び起こした現実を添えています。これは結論（いいたいこと）を先にいってから原因（そのわけ）をいう句です。古池型の句といってもこのふたつがあります。

ＮＨＫテレビテキスト１００分de名著
松尾芭蕉「おくのほそ道」長谷川櫂　参照

千住（現・東京都足立区千住）は、日光街道・奥州街道の最初の宿場として発展しました。いよいよ「前途三千里」の旅が始まります。当時の旅は友人・知人たちが、途中まで一緒に旅をして見送ることが一般的でした。芭蕉と曽良も千住まで見送られました。

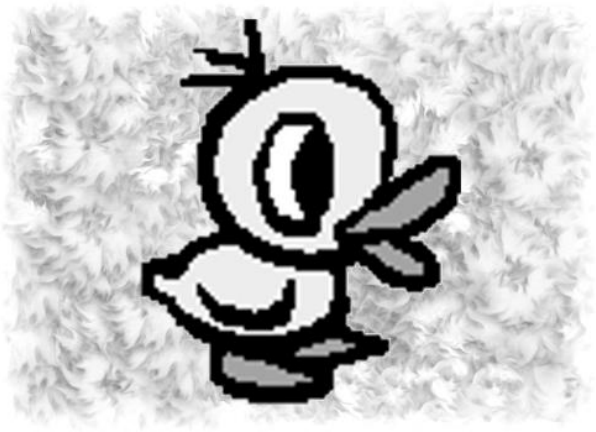
ここで詠まれた矢立初めの句（旅で詠んだ最初の句）「行春や…」と、むすびの地大垣の句「…行秋ぞ」は対をなしています。「春」「秋」は旅の始発・終着を示す季節の対応ですが、「行く」が共通項であることは意味深いものがあります。どちらも、新たな旅に出る意を暗示しています。いかに『おくのほそ道』がきっちりと練りあげられた紀行文であるかを証明するものです。

荒川区は「荒川区俳句のまち宣言」というのを出し、駅前などに解説の碑が立てられています。そこには、次のように書かれています。

「行春や鳥啼き魚の目は涙」
元禄二年三月　この句を矢立初めの句として松尾芭蕉は　その生涯をかけ「奥の細道」へと旅立ちました
芭蕉が渡った千住大橋は　江戸と東北の地を結び私たちを俳句の世界へと　いざなう大橋として昔も　いまも
これからも　隅田川に架かります
（中略）
荒川区は、俳句の魅力を次代につなぐ架け橋として、子どもから大人まで　俳句文化のすそ野をひろげ、豊かな俳句の心を　未来に伝えることを誓い「俳句のまち　あらかわ」を宣言します
平成二十七年三月十四日、荒川区

この宣言の起草委員会の委員の中に、今年の二月に九十八歳で亡くなった俳人金子兜太さんの名前を見つけました。

千住大橋の近くに素戔嗚（すさのお）尊神社という神社があり、その境内にはミニ千住大橋が平成十九年に設置され、橋を渡ると「行春や」の芭蕉碑に至るようになっています。



## B級サラリーマン渡世譚（60）

明石　幸次郎

担当者の役割（韓国編その13）

納期短縮を要請した宇都宮工場の三人にボールを投げたので、この辺で一息つこうと、横に座っているN川に売店に行くと言って席を立った。

エレベーターでB1まで下りて、地下通路を通り、旧館にある売店に向おうとした。旧館に入る手前に地上に出る階段があり、一瞬、この階段を駆け上がって、そこから、歩いて五分程の処にある喫茶店でコーヒーを、という誘惑に駆られたが、転勤になってまだ三日目という事もあり自重して、売店に向かった。

売店を外から覗いたが、明石が入社した八年前と何ら変わらず、学校の購買部の様な必要最低限の品を揃えただけで、そこを利用する従業員へのサービス、利便性などは、考えも及ばない店の雰囲気は、全く変わらずであった。警察官を退職した愛想のない爺さんと連れ合いと思しきおばちゃんが、他にすることがないから、暇つぶしにやっているような売店で、女子社員同士でジュースでも飲みながら喋っていたら、この売店の爺さんが人事部にご注進に及ぶという噂で、コーヒーなど飲んで一息つけるような所ではなかった。

明石は売店に入らず、店の横にある、自社製の牛乳自動販売機にコインを入れた。すると、ガチャン、ドーンといった音を立てて、取り出し口に牛乳瓶が落ちて来たので、それを取り出した。この自販機は、外では見かけない。それもそのはず、工業的デザインセンスのかけらもない、ただ、最低限の機能と壊れないというだけのマシーンで、この販売機を利用するたびに、外で見かけないと言うか、売れない意味が分かる気がした。

そんな余計なことを思いながら、牛乳を飲みながら、値上げ交渉のストーリーをどうするかを考えていた。さっきの電話で、資材課のM本に話の流れから、思わず八パーセントの値上げという具体的な数字を言ってしまったが、これは、まずかったと、電話を終えてからも、この事を気にしていた。

値上げは、最大限の努力をしても八パーセントが精一杯で、そこから二パーセントを捻出するとなると六パーセントしか残らない。M居が工務課長に内々に言ったのが五パーセントであるから、工場に対しては、六パーセントであれば、納期短縮でプラス一パーセントの値上げということになり、これでも値上げをしたことになる。しかし、これではM本に言った八パーセントが守れなくなり、明石は言うだけで、自分の言った約束は、実行しないという印象を工場関係者に植え付けることになってしまいかねない。それは、これから、仕事をして行く上で、不味いので、これだけは避けなければならない。

余計な事を言って、自分で自分の首を絞める事になってしまったが、そこは、切り替えの早い明石は、牛乳を飲むと何

故か、胃に入るのを感じたらポジティブな考えが浮かんできた。
問題そのものは、自分が自分に課した課題であり、この課題を達成することで、自分にとっての経験と自信を付けることに繋がるのではないか。その為、何としても一〇パーセントの値上げは達成するぞという気持ちになって来た。少し残った牛乳を飲み干して、空になった瓶を空箱に入れようとした時に、売店の爺さんが、覗きに来た。
　明石は「空瓶はこの箱に返していたら良いですか？」と丁寧に話しかけた。
「ああ、そこに入れといて！」と警官特有の目つきで、邪魔くさそうに言われてしまった。「其処に空箱があるのに、其処に空瓶を戻さず、この販売機の横に勝手にほって、いてしまう社員がいるんや！学校だけは、出てるんか知らんが躾がされてない社員がおるんや！ワシは、それを、時々、人事部長に言うたんねん！それに比べたら、アンタは、ちゃんと空箱に飲んだ空瓶を戻してるわ」と言われたので「この自販機の目立つところに“空瓶は横にある青色の空箱入れて下さい”と、書いて貼っときはったら、どうですか？」と、つい余計な事？を言ってしまった。「そうやなぁ～アンタさん、ええこと言うてくれはったなぁ。ワシも嫁はんも、字が汚いので、ちょっと、店に入って、書いてくれまへんか？」と元警官に売店の中に引っ張って行かれた。
　おばちゃんが用意したＡ４の用紙に、マジックで注意書きを書かされ、「学校出てる人は、字が違うなぁ～又、なんぞあったら頼むわ」と爺さんに褒められ、お礼にと缶ジュースを一本貰って、やっと元警官の爺さんから解放された。
　ご褒美の缶ジュースを持って自席に着くと、直ぐにＭ居が「この資料を渡しておくわ」と、渡された資料を見ると、宇都宮工場管理課長名で書かれた、Ａ４用紙四枚ほどの資料で、今回のＣＤＫ部品の見積もり書であった。
資料を読んでおくけだけでは、内容が理解出来ないので「この見積もり資料の中身を見ただけでは、分かりませんので、少し説明して貰えませんか？」と強く言ったら「まあ、明石、お前なりに、これをよく読んで、分からん事があれば、聞いてくれ！まあ、一度、目を通してくれ」と言われてしまった。
　貰った缶ジュースを飲みながら、資料に目を通すと数百点の部品の去年比の価格変動と、工場固定費の上昇率、物流コストの上昇額、結論として昨年トータル比で最低７％出来れば、一〇パーセントの値上げを要請された資料であった。昨日、会議の後にＹ管理課長から言われた「値上げ頼むよ～」と言われたのは、この資料を基に言われたのだと今やっと分かった。
　明石はＭ居に「ｍ居さん！一つだけ質問ですが、韓国に対して、七パーセントの値上げ要求をされた様ですが、なぜ、最初から一〇パーセントの要求をされなかったのですか？それと、五パーセントまでは、値上げが見込まれると言われた根拠はどこにあるのですか？」と質問した。「最初は、当然Ａ杉さんと相談して、工場からの要求は要求として、最低でも七パーセントの値上げを認めさそうという事で、ソウルに行って二日間交渉したが、七パーセントは認められないと輸入課の李課長から言われ、その後、Ｍ商事ソウル事務所の助言もあり、少し時間をかけて再交渉をＭ商事の責任でやると言うので俺は帰って来た。帰る前に、手ぶらで帰る訳には行かないので、韓国側の落としどころをＭ商事を通じて探ると５％値上げならば、了解すると言うことだったので、帰国後に俺は、Ｋ部長とＡ杉さんには、報告して、そうかとなっていたんや。其処にバングラの入札案件が絡んで来たのと、俺が韓国側に嫌われた為に外されたことが重なり、ややこしくなったのだ。お前には悪いと思うが、これも何かのめぐり合わせや！それと、お前が席を外す前に宇都宮工場のＫ定さんと電話で話をしていたのが聞こえていたが、内容を聞いて安心したわ！上手い事、話しをしていた。あの人を怒らしたら、工場からの出荷が遅れるという伝説があるんやで！お前の言い方やったら、Ｋ定さんは、無理聞いてくれると思うわ」と、Ｍ居に言われ、明石は自分の電話は多分、横で聞かれていると意識しながら話をしていたが、その電話のやり取りを共感を持って褒められたのは、嬉しかった。Ｍ居にもっと、さっきの売店の爺さんのように、鋭く尋問？しょうと思っていたが、この一言で、その気持ちが薄らいでしまった。

オクラの山たより（22）

## 雑色錦重任のこと（承前）

困了生

四

検非違使別当であった藤原公任に仕える雑色の錦重任のことを前回から書いています。「雑色」というのはさまざまな雑用をする最も低い地位の使用人だと簡単に書きましたが、もう少し言葉を加えないとこの時代の上級貴族とそこに仕える下級職員の関係はよく分からないかもしれません。
　三位以上の公卿になりうる貴族を上級貴族とすると、国家から数億円以上の年収を受け取り自身の荘園からも多くの収入を得ていた彼らは律令の制度によって自らの家政を担当する機関である政所や侍所を設置することが定められていました。政所の事務官を家司（けいし）といいます。政所では主に財政管理的な事務、たとえば荘園の管理や外部への文書の発給などをしていました。侍所では公家に所属して働く人々を統制したり主従関係の管理をしたりしていました。要するに現代の会社でいえば政所は経理・財政部および渉外・総務部。侍所は人事部・管理部というところでしょう。
もう一ついえば政所で働く人は家司、侍所で働く人は職事（しきじ）といいました。彼らは五位・六位といったれっきとした官位を持った貴族が多く、上級従業員ともいう

べき人たちでした。こうした人たちのもとに重任らが属する現場従業員とでもいうべき人たちがいたのです。

ここで大きく想像力を働かして欲しいのですが、この時代には私たちの時代のようなデパートとかスーパー、コンビニといったものはありません。貴族の生活に必要な物はほとんど自分たちの力で何とかしなくてはなりませんでした。衣食はもちろん住、つまり住宅の建設や修繕もほとんど自前でしなくてはなりません。

実際にどれほどの人間がそのために働いていたか、正確に示してくれる一次史料（当時の人たちが書き残した記録）はほとんどないのですが、類推できる参考資料ならあります。貴族の家ではないのですが、東大寺の史料があります。天暦四年（九五〇）十一月二〇日の日付を持つ「東大寺封戸荘園幷寺用帳」という文書です。この文書は天暦四年における東大寺の収支報告書のようなものですが、平安時代の宗教界の大貴族家であった東大寺ですから、京の大貴族の雑色の人数をおおよそはつかむことができます。この文書によれば、当時の東大寺は男の雑色を六十五人、女の雑色を四十人召し使っていました。つまり、一〇五人中の四〇人もの庶民の女性、おそらくさまざまな年齢の女性を召し使っていたらしいのです。現代でも全従業員の四割が女性で占められているという企業は珍しいのではないでしょうか。これは東大寺に限ってのことか、当時のすべての貴族の家によって共有されていたものか、まったくわかりません。ただ、雑色の仕事には私たちが想像する以上に女性の仕事が多かったらしいのです。具体的な数字は後であげますが、錦重任が生きていた十世紀末の平安京に暮らした庶民は男性であれ、女性であれ貴族の家の雑色となる機会をほとんど同じように持っていたようです。

どんな雑色の仕事があり人数がいかほどか、具体的に見てみましょう。なお、「東大寺封戸荘園幷寺用帳」という文書によれば、東大寺では自家の雑色たちの一部を「職掌」と呼んでいました。それは雑色たちの半数ほどがそれぞれに明確に定められた仕事の分担、つまり職掌をもっていたからです。この専門職ともいうべき「職掌」と呼ばれていた雑色たちの人数からどの分野の仕事にどれほどの人数がいたか、確認してみましょう。

まず、中間管理職である雑色の統括者である「雑色長」に男女二名ずつ。また「寺刀自」に女性二名がいて合計六名。

次に調理・食品加工に従事する雑色には男性九名、女性四名。女性の仕事として「醤刀自」は醤油・味噌・漬け物などを専門に作っていました。「酢刀自」は酢・酒をつくっています。「羹刀自」という人もいます。これは鍋物専門の調理人だったようです。

続いて日用品の製造や大工仕事の担当に男性六名。「土師工」は陶器の製造をし「造」は木製品や金属加工の製品をつくり「鍛冶屋」のような仕事もしていました。「杣」といわれた人々もいます。「杣」という言葉から見ると彼らは大工仕事を担当していたようです。

当然のことながら物品管理の担当もいます。倉の管理の「倉人」、鍵の管理の「鎰取」などに従事した男性が十人。ここに女性はいません。

その他に「小子」に男性が六人。「雑使」には女性が四人。これらはどんな仕事に専門的に従事していたのか、よく分かりません。

以上で四十五人。残りの六十人ほどの雑色たちは、これらの専門職の雑色の周囲で作業を手伝ったり文字通り雑用をしたりしていたのでしょう。

こうした仕事をしていた雑色の他に京の貴族たちには乗用車ともいうべき牛車のために牛飼童という牛の世話をする係などが必要であったでしょうから、優に百人以上の雑色がいたことでしょう。摂関家では主人のために働く雑色はおそらく数百人にもなったことでしょう。

ただし、ここで大急ぎで一言お断りせねばならぬことがあります。それは貴族の邸宅で使われている人たちの中で雑色は最下層の人々ではないかもしれないということです。たとえば「小右記」天元五年（九八二）二月二十一日に次のような記事があります。

今日、京華門の外で左大臣源雅信の雑色が刀で同家の下人を突き刺した。犯人は逃げ去ったという。今夜、下人、刀を抜いて弘徽殿の渡殿を走って登ったが、藤原頼忠様の警護の者に捕えられ、すぐさま検非違使に引き渡された。

京華門というのは紫宸殿の間近にある門でほぼ内裏の中央にあります。また、弘徽殿は后妃、親王、内親王という天皇の家族が居住している建物です。

とんでもない場所でありえない事件が起きたのですが、この記事によれば、雑色と呼ばれていた人々以外に「下人」と呼ばれた人たちがいたらしいということになります。ただし、十世紀の「下人」という言葉がどのような意味で使われているのか、よく分かりません。鎌倉時代の用例で行けば「下人」とは家内奴隷と同じ扱いを受け主人の思いのままに売買される存在でした。時には主人が家を売り払ったとき家とともに売られたという記録も多くあります。

とはいえ奈良時代に多く存在した奴婢（たとえば東大寺には二百人を超える奴婢がいました）が十世紀末には奴婢が有名無実なものとなっていたとする確かな史料もあります。ですから、古代から続く家内奴婢であるとは簡単にいえないのですが、今は奴婢と実質的に同じような扱いを受けていた下人が雑色の下にはいたかもしれない、としかいえません。その上、「小右記」を書いた藤原実資がどの程度まで雑色と下人を区別してとらえて

いたかも不明ですから、いっそう分かりません。

話が横にそれましたが、要するに錦重任は主人である参議兼検非違使別当であった藤原公任から見れば、自分の邸宅で働く百人を超える雑色の一人であったのです。

## 五

さて、主人と雑色の関係を知る上で、気になる話が「今昔物語」にあります。「今昔物語」巻十三第三十八の「盗人、法華の四要品を誦して難を免れたる語」です。

話の全体は罪もないのに主人に捕えられて痛めつけられた雑色が日頃から法華経の中で最も重要とされる四つの「品(章や編のこと)」である四要品をよく唱えていたおかげで救われたという話で法華経のありがたさを教えるものです。

もう少し詳しく述べると平正家は平清盛と同じく桓武天皇を先祖とする平氏なのですが、早くから中級貴族となった一族の一人です。正家自身、左衛門尉やいくつかの国守を務めた受領であり、また、まずまずの歌人でもありました。この正家が信濃守となって国に下ったときに召し使った雑色がこの話の不幸な主人公です。

ある日、この正家の役宅で馬の盗難事件が起きました。警護の者もいる国守の役宅での事件です。こういうときは内部に内通者がいるということがまず疑われます。馬盗人と内通していたと疑われたのは一人の雑色です。彼は馬盗人の一味ではなかったらしいのですが、主人である正家の指示によってかなり苛烈な扱いを受けることとなりました。その雑色は両足に足枷をはめられ、両肩に担がされた一本の大きな丸太に両手と頭を縛りつけられ、さらには、肩の上の丸太に重しを置かれたようなのです。この厳しい体罰は幾日も続けられたと書かれています。

この処罰を受けた雑色が法華経の霊験によって救われたという話はともかく、雑色が馬盗人の一味となって主人を裏切ったと疑われて苛酷な体罰を受けたという話のあたりには真実の一部があらわれているようです。つまり、貴族層の人々に雑色などとして仕えていた庶民層の人々は、その主家を裏切った場合、ことの真実がどうであれ、主家によって罰せられることを覚悟せねばならないということです。であるとすれば、主家に仕える身で確かに主人を裏切った庶民は、主人の前から姿を消さない限り、主人から思うままの私刑（リンチ）を甘受するほかなかったにちがいありません。

こうした話は他にもあります。

鎌倉時代初めの説話集「十訓抄」巻七二十四には平等院を建てた藤原頼通の子として生まれながら正室の隆姫女王の嫉妬心のために橘俊遠の養子になった橘俊綱の話があります。歌人としても名高く造園にも造詣が深く、かなりの風流人であったらしい人です。

「十訓抄」の記事によれば、この俊綱の邸宅の雑色所には「木馬」と呼ばれる責め道具(拷問用具)が置かれていました。この木馬の形態は「責め道具」というところから想像するほかありませんが、最も主要な用途は、やはり、主人である俊綱を裏切った雑色への懲罰であったのでしょう。当時の貴族の家において雑色所と呼ばれたのは雑色たちの詰所でしたから、その雑色所に置かれていた責め道具が自分の家の雑色たちに対して使われるものであることはいうまでもありません。

もう一つ例をあげます。先回、少しふれた「今昔物語」巻二十九第六の「放免共の強盗をせんとして人の家に入りて捕へらるる語」では放免たちがねらいを付けた邸宅に奉公する新米従者の一人を抱き込んで襲撃しようとたくらみました。放免たちはあの手この手で抱き込もうとしましたが、新米従者は表向き放免たちに従う振りをしながら襲撃計画のすべてを主人に打ち明けます。襲撃の日、すでに放免たちが襲ってくることを察知していた主家は新米従者に放免たちとの打ち合わせ通り動くよう指示し、自宅内には旧知の仲であった「兵」に協力を求めて武芸の道に練達した者を五十人ばかりを配置しました。そうとは知らずに襲撃した凶悪な放免たち十数人はあっという間に一人残らず捕えられてしまいます。ここで、現代なら警察、この時代なら検非違使庁に引き渡すところですが、主人は「こいつらは服役しても後日出獄すればきっとまた悪事をするに違いない」と考え、当時の法をまったく無視して、捕えた放免たち全員を邸宅の外で兵たちに射殺させてしまいました。こうした私刑による死刑は珍しいことではないようで、「今昔物語」巻二十九だけでも全四十話中の四つに書かれています。

とすれば、放免たちに悪事に引きずり込まれそうになった新米従者も、誘いに乗って強盗の片棒をかついだとなれば、さらには主家の前でそれが露見したとしたら、検非違使に引き渡される前に主家によって裏切り者の名のもとに誅殺されていたかもしれません。

以上、いくつかの例で示したように十世紀頃においては貴族の従者として、つまり雑色として生きる庶民たちは、その主家を裏切るような悪事を働いた場合、主家の思うままに罰せられました。当時、そうした主家のもとでの私刑によって生命を落とした庶民は決して少ない人数ではなかったでしょう。今では考えられないほど「仕える身」は辛いものであったのです。

## 六

主家である貴族は雑色たちに厳しい姿勢で臨んでいた背景には、彼らの庶民に対する強い不信感があります。この時代の貴族の日記を見ると彼らが従者として召し使う庶民たちに、かなり頻繁に裏切られていたらしいことが分かります。一つ例を出せば藤原実資の日記「小右記」

の長和四年（一〇一五）九月七日の条によれば実資のもとに彼の姉が居宅を盗人により荒らされた旨を報じられたことが書かれています。

このとき実資の姉が伝えた被害状況は決して小さいものではありませんでした。すなわち、邸内に普通に置いていた櫛箱や懐剣を盗まれた上、唐櫃の中に入れていた絹織物や盗まれてしまい、さらには彼女に仕える女房たちの持ち物までをも盗み出されていたようなのです。

盗人は鮮やかに目指す物だけを盗っていたようで死人や怪我人は幸いなことにいませんでした。しかし、日記に「已に其の数は多し（まさしく盗まれた品々は数多くある）」とあるようにこの事件で実資の姉がこうむった損害は決して軽微なものではありませんでした。

検非違使別当の経験もある実資が物色された邸内を実検したうえで憎んでもあまりある盗人の仕事ぶりを「然るべき雑物等は皆も悉く捜し取る（値打ちのある物は、そのすべてを残らず見つけ出して持ち去っている）」と書いています。被害者の関係者が「お見事」というほど鮮やかで丁寧、かつ無駄のない仕事ぶりを批評した後、実資は次のことに思いあたります。これは「案内を知るの者（邸内の事情を知っている者）」の犯行だと。値打ちのある物はすみやかにすべて持ち去るという仕事ぶりは姉の居宅の事情をよく知った雑色などの関係者であることの何よりの証拠でした。

雑色として召し使う庶民たちはいつ盗人になるかもしれぬ、というのは当時の貴族層の人たちの共通した思いであったのです。それを示す例をもう一つ。

「今昔物語」巻二九第七「藤大夫□□の家に入りたる強盗の捕へらるる語」には受領直属の部下となり、地方に下って「市をなす」ほどの財物を京の自宅に持ち帰ったところをごっそりと盗られ、使用人の一人の活躍で盗人たちが一網打尽に捕えられたという話が書かれています。すべてを紹介する余裕はありませんが、この時も一味の中に隣の家の雑色がいたのです。「今昔物語」の筆者の語るところによれば「隣にて物共を持て来たりけるを見て、入りたるなり」。つまり、隣家に多くの財物があるのをのぞき見て雑色が悪心を起こしたというのです。

この話で少し面白いのは、その雑色の妻を彼の居宅で問い詰めて一味を捕えたことです。盗人の一人となった雑色は勤め先の貴族の邸宅とは別に自分の家を持ち、そして妻もいたのです。

それはともかく「今昔」の筆者のまとめの一言です。「人の家には物共取り披きて由なからむ人などには見すまじきなり。……従者とて免すべき者にあらず（きちんとした人々というのは、自家の財産を他人の目に触れるように扱ったりはしないものである。……自家の従者であっても気安く自己の財力の大きさを教えていい相手ではありえない）」

自分の家の「従者」でさえもまったく信用できないという気持ちを貴族たちが雑色たちに持っていたことがよく分かります。そうであれば、雑色たちへの苛酷な取り扱いも理解できるというもの。そういえば清少納言も「枕草子」の「おぼつかなきもの（不安に思うもの）」という章段で次のようにいっています。

今出で来たる者の、心も知らぬに、やむごとなき物持たせて人のもとにやりたるに、遅く帰る（新しく働き始めた召使いで気心も知れない者に、大切な物を持たせて使いにやったところ、その帰りが遅いとき。）

清少納言も庶民に対してはいつ悪心を起こしてもおかしくはないと警戒心を持っていたのです。

## 七

さらにもう一つ貴族層の人々が庶民を信用しない理由があります。この時代の人々一般に近世の「武士道」で唱えられた「君、君たらずといへども、臣は臣たれ」という道徳観はまったくありません。「自力救済」が基本の世ですから、主家が没落するやいなや「自分に利益をもたらさない主人に仕える義務はない」とばかりにさっと従者たちが消えてしまうのが常識の時代でした。たとえば安和の変で源満仲（源頼朝などの河内源氏の先祖です）の密告によって失脚した左大臣源高明の広大でかつ華麗であった西宮第は一年も経たずして荒草が生い茂ってすっかり荒廃してしまったと「栄花物語」で書かれています。

考えてみれば、一二〇メートル四方の敷地を管理しようとすればかなりの手間がかかります。自分の邸宅の池、寝殿造には池がつきものですが、この池の管理にかなり苦労している様子が貴族の日記によくあらわれます。京都の地が北から南に向かって緩やかに傾斜しているとはいえ、下水道がわりとなっている邸宅の側溝は当時ほとんどゴミ捨て場所と化して水はけの悪い状態でした。そうなると寝殿造の正面にある中の島つきの池も台無しです。せっかくの池には清らかな水はなく、そこに落ち葉がたまっていたり動物の死体が浮かんでいたりしては、風情も何もあったものではありません。第一、腐敗臭が強烈に漂ったはずですから雑色たちがせっせと掃除をすることとなります。しかし、こうした雑色たちも主家の命運が傾き始めるとあっという間に雲散霧消してしまい、その結果、宏壮な邸宅はあっという間に荒れ放題になるという次第です。

芥川龍之介が書いた王朝物の一つに「六の宮の姫君」という作品がありますが、もとの話は「今昔物語」巻一九第五「六の宮の姫君の夫出家の語」です。六の宮の姫君の父は皇女の子として生まれましたが、官は五位相当の兵部大輔にと

どまりました。そうなると邸宅をあれこれと手を入れてくれる人もいなくなり姫君たちは「荒れ果て残りたる東の対にぞ住みける」ということになりました。この後、姫君は父を失い貧窮をきわめて「極楽も地獄も知らぬ、不甲斐ない女」の人生をたどるのですが、そのことは芥川の小説で読んでもらうことにして、主家が召し使う従者たちにどこまでも主家に尽くす忠義の心などは、当時の史料を読む限りどこにもありません。いつなんどき自分を見限って消えてしまうか分からない使用人に全幅の信頼を寄せることなどはまず難しいでしょう。

蛇足ながら、時代はぐっと下がりますが、この「自分に利益をもたらさない主人に仕える義務はない」という感覚は戦国時代の終わりまで続きます。たとえば、徳川家康の側近として幕閣にも匹敵する実力ありとされた藤堂高虎（三重県の津藩の藩祖）などは一生に七回も主人を替えた「渡り奉公人」でした。亡き主君のために命を捨ててまで忠義を尽くす近世の「忠臣蔵」の話は戦国時代以前の武士たちの間ではほとんど悪い冗談と思われたことでしょう。

八

さて、錦重任の申請は藤原公任に聞き届けられたでしょうか。筆者はまず五分五分だろう、と考えています。普通であれば、まず「小物が何をいっているのか」とすぐに却下でしょう。五〇パーセントぐらいの見込があったのでは、と考えるのは次の理由からです。

重任の上申書によると藤原公任の祖父である摂政関白実頼、父である関白頼忠、そして公任と三代にわたって父親の福用（ふくもと）とその子である重任が少なくとも三〇年以上は仕えてきたとあります。親子二代にわたって三〇年以上、同じ主家に仕えることは誠に珍しいことであり、ゆえに、錦重任という雑色は藤原公任の家においてかなり重要な従者であったと考えられます。公任家における重任の立場は「譜代の雑色」ともいえるものだったでしょう。

重任の上申書の日付は長保元年三月二十九日です。公任は数えで三十四歳。公任の祖父の時代から仕えていた可能性のある重任は公任の家の過去のことについて公任の知らないことまで知っていたかもしれません。そうした「譜代の雑色」である重任は「欲が深く油断できない」「正直の心は持たない」と貴族からは見なされていた庶民の一人ではあるけれども藤原公任の家ではかなり信頼されていたはずです。

また、重任という奉公人は、その名前からも奉公先である公任の家でかなり大切に扱われていたに違いないことが分かります。

一般に平安時代の貴族たちは元服を迎えた息子たちに名前を与えるときに「兄弟通字」といわれる命名法にしたがって名前をつけることが珍しくありませんでした。

たとえば藤原道長の兄弟は道隆、道綱、道兼、道長と「道」の字を共通に持っています。清和源氏でも源満仲の息子たちは頼光、頼親、頼信と「頼」の字が共通です。そして「重任」「重延」の兄弟のことを考えると「兄弟通字」は庶民たちにもあったことだといえます。また、この二人が「重」の字を持つことになったのは、「大鏡」で夏山繁樹の命名が主人によるものであったように、福用を召し使っていた藤原頼忠が福用の最初の子どもに「重任」という名前を与えたからではないでしょうか。そして、頼忠が自分の息子と同じ「任」の字を与えたことは頼忠だからこそなしえたことであり、大きな信頼感があればこそのことだったでしょう。

錦重任が主人である藤原公任に超法規的な扱いを上申したのも以上のような背景があったのだと考えられます。

最後に錦重任は無事に弟の重延を助けることができたでしょうか。また、どういう人生を歩んだのでしょうか。残念ながら、それはまったく分かりません。今に残るのはたった一枚の「錦重任解」だけなのですから。そうはいっても必死の思いで書いた文書がはからずも千年以上も経った現代の筆者に彼の存在を伝えてくれることにちょっとした感動を覚えます。筆者が古い記録に心ひかれる理由の一つです。

## 邪馬台国と火の国（補足1）

満田　正賢

前月号まで「邪馬台国と火の国」というタイトルで拙稿を三回連載させていただきました。編集者のご尽力によって芥川だよりが継続発行されることとなり、今後は邪馬台国があった三世紀以降近畿王朝が名実共に日本を支配する七世紀末までの日本の古代史に隠された歴史を綴りたいと思っていたのですが、私の「邪馬台国論」に関して書き足りていない部分が多くあり、その補足をしなければ、「邪馬台国と火の国」が私のロマンを書き綴っただけのものととられてしまうという危惧をもちましたので、まずは引き続き「邪馬台国論」の補足をさせていただくことにしました。

一．古代中国の測量法（一寸千里法）から考察した邪馬壹（台）国・女王の都の位置

（1）「一寸千里法」について

谷本茂氏は論文「中国最古の天文算術書『周髀算経』之事」において、中国最古の天文算術書である「周髀算経（しゅうひさんけい）」の中にある記載を検証し、一里は七六～七七メートルとなることを実証しました。そして上記論文で「周髀算経」の記載内容を以下のようにまとめています。

①周の地において、夏至の日、八尺の棒の影の長さは一寸六尺、南千里の地においては一寸五尺、北千里の地においては一寸七尺、よって、八尺の股（直角三角

形の長辺）に対する勾（直角三角形の短辺）の差一寸は、地上の距離にして千里にあたる、これが一寸千里の法である。

②夏至の日に八尺の周髀の影は一尺六寸であり、冬至の日は一丈三尺五寸であるから、夏至の日の太陽は観測地より南一万六千里の地の真上にあり、冬至の日には、南十三万五千里の地の真上にあると測量している。地面は平らであると考えている。

③太陽の高さ及び径を求めた記述。夏至以降、影は段々長くなり、丁度六尺になる時がある。この時、孔の径一寸、高さ八尺の竹筒をとって、太陽の径を見ればその孔と太陽が一致する。よって太陽の大きさ（径）は、八十寸先に在る一寸の物の率から求められる。

今、股八尺勾六尺であるから弦（直角三角形の斜辺）は十尺である。即ち、観測地より太陽の真下の地まで、六万里、太陽の高さは八万里観測地から斜めに十万里彼方に太陽がある。太陽の径は十万里の八十分の一＝一千二百五十里と求められる。

④八尺の表を立てて極を望むと、その勾は一丈三尺（一百三寸）であるから、周の地から北へ十万三千里行くと極下に至る。

以上の例のように、周髀算経では昼は太陽を、夜は北極を利用して天地の大きさ（方位）求めることが出来るとする。

「周髀算経」は、一里の長さは既定の基準として、天蓋説を前提に三角測量法と比例の考え方を用いて周（洛陽）と離れた地域との距離（実際には緯度の差）、太陽との距離、太陽の径、北・南回帰線上の地域との距離、北極下の地域との距離を測定する方法を示した天文算術書です。

（2）周髀と一寸千里法に関する後漢書と晋書の記述

①後漢書志第十巻天文志天文上にある蔡邕（さいよう）「表志」の引用文

谷本氏の論文で指摘されていますが後漢書天文志の中に周髀に関する蔡邕「表志」の引用文があります。蔡邕は後漢代末の政治家・儒家・書家ですが辞章・算術・天文を好み音律に精通しました。後漢書蔡邕伝には蔡邕の多くの著作が紹介されています。蔡邕は天文学に三つの説があると解説しています。

A．周髀説

天は円く広げられた傘のようであり、地は方形の碁盤のようであるとする。

B．宣夜説

天には形体というものがなく虚空であるとする。

C．渾天宣夜説

天は鶏の卵殻のように球形であり、地は卵黄のようにその内部に位置し、天は大きく地は小さいとする。

＊右記の三説の要約にはウィキペディアの記述を引用しました。

そして、周髀（天蓋）説は天文現象との相違が多いので、史官は渾天説をベースに測定機器（候台所用銅儀）を用いて天体計測をしていると紹介しています。

②晋書第十一巻天文志天文上にある周髀（天蓋説）の記述

晋書でも蔡邕の三説を紹介しており、同じく、周髀（天蓋）説は天文現象との相違が多いと記述しています。但し後漢書で使われた「周髀説」という言葉は「天蓋説」という言葉に置き換えられています。そして、晋書においては天蓋説の説明として周髀算経の内容を詳細に紹介しています。周髀（天蓋）説では周髀の影の測定により、算術を用いて遠近の数値を得られると説明しているのです。

（3）一寸千里法に関連する文献

①インターネットに野上道男氏（東京都立大学名誉教授）の「古代中国の緯度測量法」という論文が載っています。この中で野上氏は「一寸千里法は緯度の測量法だと理解する視点が必要だ」とし、「洛陽付近における夏至南中時の日陰測定値と緯度」の計測例を十例挙げています。

＊淮南子一例、周髀算経二例、漢書一例、周礼二例、晋書三例、旧唐書一例

野上氏の挙げた例の大半は、周髀算経そのものに記載されている例です。周髀算経の中には周礼の記述から大唐貞観二年の（旧唐記の）記述まで異なる時代、異なる場所での夏至・冬至・（春秋分）の日陰測定値が十二例載っています。測定場所は陽城・長安・洛陽・建康（金陵）などです。しかし、これらの例は必ずしも一寸千里法を証明した例ではありません。異なる時代で影の長さの測定値が異なるとか、一寸千里法が間違っているなどという一寸千里法を疑問視する例として取り上げられているものです。ちなみに、南北朝の梁の時代に金陵（南京）で測定した日陰の長さを一寸千里法で計算しても金陵・洛陽間の実測値と合わないという記述がありますが、これは金陵・洛陽間の実測値を長里で計算しているからです。周髀算経の編者には一寸千里法が短里で成り立っているという認識がなかったのではないかと想像出来ます。

②淮南子（えなんじ）は前漢の武帝の頃、淮南王劉安が学者を集めて編纂させた思想書です。淮南子天文訓は、東西を横の線、南北を縦の線にした方一里の四本の表（棒）をもって地（世界）の東西の広さを知ることが出来るとし、その測定法を紹介しています。また、「天の高さを知るには高さ一丈（十尺）の表を正南北に千里を隔てて立てて、同日にその陰を度る。北表の陰は二尺になり、南表の陰は尺九寸になるから、千里南へ行くと陰が一寸短くなるわけだ。・・・・」（国立国会図書館デジタルコレクション－淮南子・現代語訳）という文面が続きます。これは測定方法の異なる「一寸千里法」と言えるものです。前漢代に違う表現の一寸千里法が存在しており、地は方形の碁盤のようであるとする天蓋説が前提となっていました。しかしこの淮南子の一寸千里法が周髀算経の一寸千里法に先行した測定法であるとも断定出来ません。周髀算経が周代の「周髀（八尺棒）」による一寸千里法を復活させた可能性もあります。すなわち前漢代には周代に発見された「一寸千里法」という言葉だけが残っており、淮南子天

文訓はわざわざ独自の測定法で一寸千里法を説明した可能性もあると思われるのです。

（4）中国の各史書の記述から考察できること

①周髀算経が示した天蓋説は、すでに前漢代から知られていました。しかし後漢代には天文現象を理解する説としては劣った説であるという評価を受けていました。

②しかし、天蓋説が生き残っている理由は、まさに周髀の影の測定により、算術を用いて遠近の数値を得られるということにありました。

③間違った手法ではあっても、現実に算術を用いて遠近の数値（近似値）が得られる為に天蓋説は生き残り、後漢代には周髀説と呼ばれていたのではないでしょうか。すなわち天蓋説が周髀説と言われていた背景には、実際に周髀を用いて距離測定を行っていた当時の実態があったのではないかと想定できます。

（5）「一寸千里法」による距離測定について

①夏至の時の洛陽での「周髀」の陰の長さは一尺六寸ですが、北回帰線上の場所であれば陰の長さは0になるはずです。その間の距離は「一尺六寸」×七六キロ（一寸当たり）＝千二百十六キロと求められます。洛陽と北回帰線上に近い広州はほぼ同じ経度であり、その間の実際の距離は千四百六十キロなので、一寸千里法で得られた距離と実際の距離との誤差は約二十パーセントです。そしてこの誤差は天蓋説の考え方から生ずるものです。すなわち緯度の差を球面上の距離と見なすことによって生ずる誤差と考えらます。しかし、逆に言えば一寸千里法は洛陽・広州の間にある地域と洛陽間の距離の測定において測定誤差を別にすれば二十パーセント以内の誤差範囲で真の値に近づくことの出来る貴重な計測法であると言えます。

そして、この計算結果は周髀（八尺棒）を用いた一寸千里法が短里で記載されていることの証明にもなっています。

＊現代の中国では一里＝五百メートルです。古代中国の一里の長さは時代によって変化していますが、四百メートルから六百メートルの範囲にあったとされています。この「長里」に対し古田武彦氏は「魏志倭人伝は七五～九〇メートルの『短里』で記述されていた」と主張し、谷本茂氏が論文「中国最古の天文算術書『周髀算経』之事」によって七六～七七メートルの短里の存在を証明しました。洛陽・広州間の距離を千里＝七六メートルと仮定し「一寸千里法」で計算して近似値が得られたということは、「一寸千里法」には短里が使われている（長里であれば成り立たない）ことの証明となっています。

②「一寸千里法」の測定は南北間の距離（緯度差）測定でしか使えません。しかし、平壌と八代の経度のずれは約五度であり、簡便的に概略の距離が算出出来る場所といえます。魏志倭人伝の元資料を記した帯方郡の郡吏は夏至の日に帯方郡治で「周髀」の陰の長さを測っておき、女王国で夏至の日をとらえて「周髀」の陰の長さを測定すれば、概算での距離が得られると考えたのではないでしょうか。

（6）野上道男氏の論文「中国古代における地の測り方と邪馬台国の位置」について

①前述した野上道男氏には「中国古代における地の測り方と邪馬台国の位置」という別の論文があります。これは野上氏が二〇一五年に東京地学協会伊能忠敬記念講演会で発表したものです。

②野上氏は「方位と距離」「天文測量法としての一寸千里法」「一寸千里法についての野上の見解」「古代中国の地図」「方位の測量法」「方向線の延長方法」という小題で語ったあとで、最後に「邪馬台国はどこか」という小題で講演を締めくくっています。最後の小題の主旨は以下です。

A．魏志倭人伝の「郡から狗邪韓国は七千里」「邪馬台国は東南一万二千里」と記述されている。郡から倭へ派遣された魏使は朝鮮半島の西岸と南岸の複雑な海岸線を回ってジグザグに水行（沿岸航法）して狗邪韓国に至っている。当時は海図がなかったのでこんな航路の長さは測れない。あきらかに「七千里」は測量値である。ほかに測量方法がないことから、この値は「一寸千里法」による測量値である。

B．「一万二千里」は魏使の行程距離であるわけがなく、唯一の選択肢として、天文測量による成果であることは自明である。しかし、驚くべきことに、ほとんど全ての歴史家は、帯方郡から人が移動したその海陸行程「東南一万二千里」のところに邪馬台国が存在していたと思い込んでいる。史書に数値があっても、その数値をどうやって得たか（測量法）に全く思いを致していないようである。

C．「東南一万二千里」という測量結果から、邪馬台国は宮崎平野南部に、誤差を考慮しても南九州に、存在したといえる。同じく「狗邪韓国」は巨済島付近である。日影長を測るには誰かが夏至のころそこに居なければならない。遣倭魏使団の誰かが倭女王卑弥呼の出身国邪馬台国まで旅行し、一万二千里という距離の根拠となる日影長を観測したのであろう。

D．倭国＝邪馬台国とする歴史家は少なくないが、ここでは邪馬台国は卑弥呼の出身国にすぎず、倭国の首都は北九州（多分伊都国）にあった。熊本県は（かつて）細川首相が治めていた（知事であった）という文で、「熊本県」を「邪馬台国」に、「細川首相」を「女王」に置き換えると漢文法には時制はないので、「邪馬台国女王之所都」となる。

E．魏志倭人伝は、その著者と想定読者（朝廷百官）の測量法に関する共通の素養を前提に読まれるべきである。現代の我々は「周髀算経」の「一寸千里法」という天文測量法を正しく理解することによってのみ、邪馬台国（所在地）を知ることができるのである。

③野上氏は、「一寸千里法」（に方位を加味したもの）という当時の中国の常識となっていた測量法で邪馬台国の位置を探るべきであり、その結果女王の所在地は（野上氏は女王卑弥呼の出身地と考えて

いますが）南九州であると推測できるとしています。この野上氏の説は私が「邪馬台国と火の国」で推定した女王卑弥呼の所在地に一つの根拠を与えてくれています。

二、持衰（じさい）に関する記述にある中国との直接交流

魏志倭人伝の倭人の風習に関する記述の中に持衰に関する記述があります。持衰というのは船旅の安全祈願の為に特定の人物を選抜しその人物に禁欲生活を強いる一種の人身御供のような風習です。特筆すべきは、これが中国に渡航する際に用いられていると記述されていることです。当時、博多湾沿岸を含む日本海側各地の大陸との交流は朝鮮半島より北の日本海沿岸にある大陸各地との交流でした。中国に直接渡航していた地域は九州西海岸から沖縄までの地域に限定されます。この風習は帯方郡の使者が記述した女王国の風習が九州西海岸の風習であることを示唆した記述です。この持衰に関する記述も「魏志倭人伝に描かれた女王卑弥呼の統治範囲は後の火（肥）の国の範囲と一致している」という推論の根拠となっています。

## アウトソーシングとディシプリン

大江　雉兎

アウトソーシングという言葉がある。このカタカナ言葉が注目されるようになって十年以上は経つと思うが、要は人材の外部起用もしくは業務の外部委託のことである。指し示す日本語が存在しているのに、わざわざカタカナ語を使うのには抵抗を感じないでもないが、このアウトソーシングについては、とある出来事をきっかけにして、少しばかり異なる考え方を持つに至った。普通の日本人が普通に日本語を用いて「人材の外部起用」とか「業務の外部委託」とか言う場合とは、まったく異なる業態としてのアウトソーシングが存在していることを知ったからである。なかなか興味深い出来事なので、今回のその一件の報告をしておきたい。

外部起用や外部委託というと、普通はどういうイメージを持つだろうか。この普通はかくかくしかじかだろうという点でズレが生じているのかも知れないのだが、少なくとも当方の理解は、まず事業者が主体的に執り行う業務があるというところから始まる。その上で、全体を円滑に処理するために一部を他に発注する、というパターンだ。根幹になるのは、当該事業者がメインとする業務を持っている点である。様々な事情が絡まって業務の内容や質が変わることもあるだろう。また事業規模が、当初のものよりも大きくなることもある。それに対して旧来通りの方法論で対応が難しくなった時、外部委託なり外部起用なりの判断を行うのは至極まっとうなことと考える。

これに対して、カルチャーショック的な衝撃を受けたのは、事業者主体が自らのメイン業務を持たずに他から仕事を集めてきて、それを外部に委託する業態が可能になっていることを知ったことである。確かに、需要と供給の橋渡しとか調整役とかいえば聞こえは良いのだが、端的に言えば丸投げとピンハネである。対応する範囲が広いので事業として成り立っているのだろう。だが、業務に伴う特殊性や専門性をかなり大胆に捨て去っているところも見え隠れする。もっとはっきり言うのなら、当該事業者が行うのは需要と供給の間を取り持つことだけであって、両者の間でやりとりされる商品ないしはサービスの質には関与しない、ということである。従来的は発想に従うのなら、事業者は自らが本分とする分野があるわけだから、その分野に関しては「餅は餅屋」的な対応が自然になされる。それに対して、品質に関与せず、仲介だけを行う業態であれば、たとえ低質な商品ないしサービスがやりとりされていたとしても、コミットしない。

もちろん、こうした業態が可能になるのは「餅は餅屋」に倣っていうのなら、餅だけを扱う業者では出来ることではない。餅も扱うし、大根も扱うし、褌の洗濯だって任せてくださいというぐらいのオールラウンド的なものでないと成り立たない。逆に、そのくらいのオールランドさがあれば、餅は餅屋を貫く事業者を凌駕することもできる。「外部起用」だの「外部委託」だのの日本語でイメージできるのは、「餅は餅屋」的なスタンスを保ちながら業種・業態を拡大したケースであり、オールラウンド＝全方位的な仲介業を行うことで成り立っているのがアウトソーシングという、かつては存在しなかった新形態であるように思う。

二～三十年ほど昔の文章になるが、これからの社会を予測する文脈でディシプリン（discipline、日本語に熟していないので以下アルファベットで記す）の低下を挙げた評論家がいた。当時、その文章を読んだ時、discipline とはいったいなんなのかが分からなかったし、英和辞典で調べて規律とか修行とかの訳語を得たところで、文脈的にすっきりしなかったことを覚えている。しかし、専門性に重きを置いた技能修得が軽視されるようになった昨今の風潮、すなわち「餅は餅屋」を貫くよりは、取り扱い量の多さで質を圧倒する風潮を眺めると、こうした状況こそが discipline の低下なのかと思ってしまうのである。

さて、ここまでのところ、抽象的な物言いを重ねてきたが、こうしたことに思い至ったきっかけとなる出来事についても書いておこう。アウトソーシングで文章の提供を行うS社の事業に参加したのがきっかけだった。顧客から注文のあった文章を外部のライターに書かせ、求められる基準に達していると判断した場合はライターに報酬が支払われる。外部委託が一般化し

つつある近年の風潮からいっても、こうした業態が可能になるのは理解できるのだが、驚かされたのは顧客に納品する際の品質を担保する仕組みもまた外部委託されていた点である。S社の内部では文章チェックをしないにも関わらず、文章作成事業に携わっているのである。結果、驚くべきチェックが行われている。

○ケースA

食育アドバイザーという民間資格に関する記述で、その資格が必要となる社会的背景を法律の条文を引用して説明したところ、「同一の文章が他人のサイトに挙がっています」との指摘を受けた。

引用した条文での一致を言ってわけだが、言うまでもなく一致しない方がおかしい。一定字数以上の重なりを機械チェックした結果だと思われるが、問題はそうした処理だけで最終判定を下していることである。

○ケースB

伝統工芸を活かした商品を紹介する文章で、具体的に取り上げる商品数が四つと指定されていたので複数段落に分けて四つをあげたところ、一つの段落に二つしか挙がっていない点で指定個数に足りないとの指摘。

単純に文章を全体で読んでいないのだろう。斜め読みで固有名詞が登場する箇所に照準を合わせ、指定条件を満たしているか否かを判断したものと思われる。

○ケースC

室町幕府十代将軍足利義稙のプロフィールを分かりやすく書くように求められた文章に対して、応仁の乱と織田信長登場に挟まれた混乱の百年を「歴史マニアにとっても扱いの難しい課題」と記述したところ、分かりやすくという条件に合致しないとの指摘。

「難しい」という文言があるから「分かりやすく」に合致しないとの判断は噴飯物なのだが、顧客の求める条件に対応していないという主旨であれば、当方の非は認めねばならない。もっとも同じ文章で義稙が「流れ公方」と揶揄される経緯を当時の落首を引いて説明した箇所を誤字とする指摘もあった。もちろん誤字でないことは確認済みなので、現代日本語でない部分を誤字と見做したのだろうか。だとすれば、どういうチェックが為されているのか、むしろ興味深くさえなってくる。

以上、三つのケースは、たまたま低質なチェック担当者（外部委託）と遭遇しただけなのかも知れないが、要はそうしたレベルのチェッカーが業務に関与しうる点である。S社のみに限定した話にするのなら、S社は文章事業に関わるだけの能力は持ち合わせていない。しかし、S社はコンテンツビジネスを謳うW社の中での文章部門に過ぎない。W社全体として成り立っているのであれば、十分という判断なのだろう。つまり取り扱う全体数が膨大なので、S社の中のごく一部が関わる微量の愚鈍チェックは希釈される、との判断がでもなされているのだろう。いずれにせよ、自社内で品質管理をしないのがアウトソーシングだという、見ようによっては新鮮とも評価できる刺激的な業態を垣間見た思いである。

ところで、このS社に関わって、もう一つ面白いと感じたのは、こういう形態で提供された文章のジャンルについてである。趣味など当たり障りのないジャンルならともかく、カードローンの利用方法や仮想通貨の解説、あるいは転職マニュアルなど、いくぶんデリケートなジャンルの文章もアウトソーシングに出されている。それらは報酬額も高く、片手間でちょいちょいと書いたりできるものではないのだが、そうしたジャンルの文章でさえアウトソーシングで賄われているのだと知ると、ネット界隈に溢れる多様な文章の信頼度についても思うところが出てくる。

ネットリテラシーという言葉が使われるようになって久しい。よく言われるのは、5ちゃんねる（旧2ちゃんねる）のような匿名掲示板に書き込まれた情報やツイッターなどSNSに流れる話題を鵜呑みにしてはいけないということなのだが、素性のしっかりしたサイトに掲載された文章でも、実はアウトソーシングで賄われたものである可能性があるのだとすれば、信頼度が保留に傾く度合いも大きくなる。一見まともそうに見える文章でも、ゴーストライターが書いた文章であり、適切とは言いがたいチェックをすり抜けて公開されている可能性もあるからである。もちろん、ゴーストライターの文章にもしっかりした内容もものはある。だが先に挙げたルーズなチェック体制に照らすと、作成する方にも場当たり的なもの、無責任なものがシステム的に混じってしまうのも避けられない。

個々の discipline が果てしなく低下している現代社会である。これもまた致し方ない状況なのだろう。

## 編集後記

災害もなく住みやすいと言っていた高槻も今回は地震の震源地になりました。活断層は幾つかあるが、地震の予想は誰もしていなかった地域です。

また、地震に続く大雨です。家屋や地盤が地震で崩れやすくなっている時の大雨です。一体どうなってしまったのかと不安が強まります。

長年にわたり寄稿していただいていた、眞糀さんが都合により芥川だよりを卒業されました。

創刊号から今日まで「女９０歳の軌跡」を書き続けていただきました。本当にありがとうございました。

当店も七月二十五日をもって閉店させて頂きます。本当にありがとうございました。これからは、芥川商店街のトミヤ・カフェで時々、着物から洋服へのオーダーの受注会を開きながら、お客様へのご要望に応えていきます。店は閉店しますが、仕立て業務は継続していきます。

（嘉）

# 連載 ふみの道草　山椒魚

## ふみの道草（1）

○「サヨナラ」ダケガ人生ダ

折々の道草をふみに綴る。道草だから思いつくまま。他愛もないことが多々ある。道にも迷う。迷うけれども住んでいる世界は狭い。ぐるぐると堂々巡りをしながら、ぽつぽつと山椒魚が独り言を吐くようなものである。

さて、その昔、ずいぶん気負って卒業アルバムにこんな文を寄せたことがある。二〇〇三年のことである。反響はなかった。

遊ぶ時間はたっぷりあったか。何かに夢中になったか。生きることの哀しみや苦さを、そして喜びを胸に刻んだか。仲間はいたか。

問いかけようとしても、私は諸君について多くを知らない。せめては、別れに詩を贈ろう。中国の詩人・于武陵（うぶりょう）の『勧酒』。訳詩は井伏鱒二による（井伏鱒二、『厄除け詩集』、筑摩書房、一九七七年。詩の発表は一九三五年）。

勧酒　　于武陵

勧君金屈巵
満酌不須辞
花発多風雨
人生足別離
コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

「サヨナラ」ダケガ人生ダ。その時を迎えて、誰のものでもない諸君の人生が始まる。

諸君は何を学んだか。人類五千年にわたる文明の歴史の総体―人間が生きてきた自然、構成した社会とその歴史、築きあげた文化である。その中で先人の人生を、人類という他人の人生を追体験した。それは、人間はどう生きてきたかを知るために、そして一人の人間になるために必要なことであった。しかしこれからは違う。他人の人生の追体験はなお必要であるが、諸君は自らの人生を創造し、生きなければならない。

人生の夜明けが始まる。諸君の前途に誇りあれ、夢多かれと祈る。

道草はしたが世間を知らぬ私は、五十半ばで知った「サヨナラ」ダケガ人生ダに相当どきりとしたのであった。ちなみに、おそらくは井伏鱒二の訳詩に触発されてであろうか、私が大学に在学していた一九六九年にはすでに、六文銭が『さよならだけが人生ならば』（寺山修司作詞、小室等作曲）と歌っていたことなど知る由もなかった。

さよならだけが人生ならば
また来る春は何だろう
はるかなはるかな地の果てに
咲いてる野の百合何だろう

さよならだけが人生ならば
めぐりあう日は何だろう
やさしいやさしい夕焼けと
ふたりの愛は何だろう

さよならだけが人生ならば
建てたわが家はなんだろう
さみしいさみしい平原に
ともす灯りは何だろう

さよならだけが人生ならば
人生なんていりません

「サヨナラ」ダケガ人生ダ―にしろ、さよならだけが人生ならば―にしろ、「サヨナラ」と「さよなら」の言葉には人生とは何だろうという思いが込められている。「サヨナラ」だけが人生か、永遠の問いである。

## 俳句

土田　裕

若竹のはや撓ること覚えたり
河鹿笛聞きつつ眠る田舎宿
網戸より入り来る朝の風に醒む
片陰を出て片陰を目指しけり
ふるさとに廃屋あまた青田風

影山武司

膝小僧くきくき鳴りて夏に入る
コントラバス抱へて急ぐ立夏かな
球場の喚声飲み込む鯉幟
青蘆の葉擦れの音の風の中
草の影の水に鮮やか夏野行く
浮島の草の波打つ夏帽子
ざりがにを掬ふタモ網水を切る
野茨の花の香まとひ木道ゆく
受けとめてほしき人へと草矢射る
開花へと力溜めたる蓮華かな
戴帽式いのち見つむる眼の涼し